

研究紀要

第9号

1992

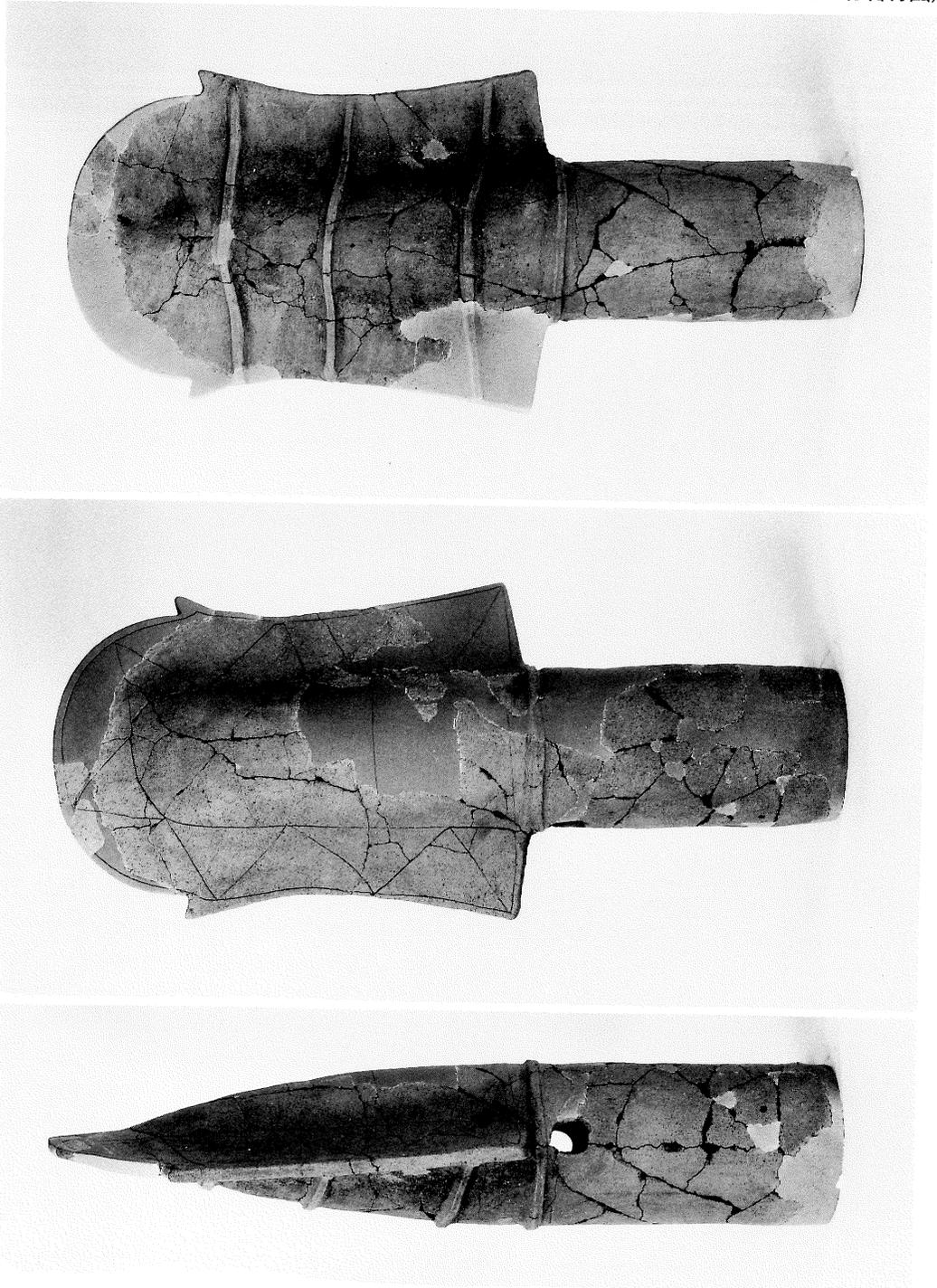
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研 究 紀 要

第 9 号

1 9 9 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



小前田2号墳出土盾形埴輪

目 次

序

〈論文〉

若宮遺跡出土土器群の再検討 宮崎朝雄 金子直行…… 1
—静岡県東部における押型文系土器群の出現と展開—

将監塚遺跡・古井戸遺跡における
羽状縄紋を有する加曾利E式土器 橋本 勉…… 27
—集落と土器研究の一視点—

土偶の破損 濱野美代子…… 43

鍛冶谷・新田口遺跡出土土器の分析—前篇— 福田 聖…… 59

古墳時代馬小考 山川 守男……103

出現期模倣坏の検討（一） 大屋道則 中村倉司……119
—岡部町地神祇遺跡A地点資料による検討—

掘立柱建物の機能と構造 昼間 孝志……129
—埼玉・群馬県の集落遺跡の例を中心にして—

郡家造営事始め 田中 広明……141

板碑の廃棄に関する基礎的検討（一） 宮瀧 交二……167
—埼玉県内における井戸跡出土の板碑をめぐって—

〈資料紹介〉

小前田2号墳出土の盾形埴輪 瀧瀬 芳之……177

若宮遺跡出土土器群の再検討

—静岡県東部における押型文系土器群の出現と展開—

宮崎朝雄 金子直行

要約 押型文系土器群の出現を含む前半期の編年については、押型文土器出現前段階の土器群が不明である事、及び押型文系土器群の変遷を示す層位的遺跡が少ない事などから、研究者間における意見の相違が大きく混乱した状況を呈している。静岡県東部に位置する若宮遺跡は、押型文土器出現前段階の表裏縄文系土器群とそれに続く押型文系土器群が纏まって出土した稀な遺跡であるが、時期が複合しているため土器群の変遷を把握する事が困難であった。近年、静岡県東部地域において、三の原遺跡、尾上イラウネ遺跡、東大室クズレ遺跡など若宮遺跡出土土器群の変遷を示唆する好資料が相次いで報告された。本稿では、これらの遺跡と若宮遺跡の出土土器群を比較検討しその変遷を辿る事によって、静岡県東部における押型文系土器群の出現と展開を考察した。その結果、若宮遺跡出土土器群は、第Ⅰ段階 押型文土器出現以前、第Ⅱ段階 縦位密接押型文土器、第Ⅲ段階 縦位密接押型文土器と異方向密接押型文土器、第Ⅳ段階 異方向帯状押型文土器を主体とする段階的な変遷を辿る事が確認できた。

I 若宮遺跡をめぐる研究

若宮遺跡は1979年～1982年にわたり、西富士道路建設に伴い富士宮市教育委員会により発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代早期の住居跡28件、炉穴跡60基などが検出され、早期前半の集落跡の中では破格の大規模集落として注目され、現在に到っても類例は無く、その存在は飛び抜けている。出土土器は押型文土器を主体として、縄文土器、撚糸文土器が多量に出土した。押型文土器は縦位密接施文を中心にした立野式に類似する土器が主体であったため、先後関係が問題になっていた立野式、樋沢式の関係にも一石を投じ注目を集めた。また、縄文土器、撚糸文土器については、押型文土器との関係及び草創期表裏縄文土器群との連続性からも注目を集めた。若宮遺跡に対する期待の大きさは1982年に長野県諏訪市で実施された、「樋沢遺跡発掘調査シンポジウム」における各研究者からの発言に窺う事ができる(戸沢他1987)。1983年、待望の報告書が馬飼野行雄、伊藤昌光両氏を中心にして纏められた(馬飼野・伊藤1983)。報告書では、早期前半の出土土器群をⅠ～Ⅵ群に分類している。Ⅰ群 表裏縄文土器、Ⅱ群 縄文土器、Ⅲ群 撚糸文土器、Ⅳ群 異方向帯状押型文土器、Ⅴ群 縦位密接押型文土器、Ⅵ群 無文土器に分類し、各群を文様や口唇部形態などによりさらに細分した。さらに、これらの土器群を伴出状況と型式学的検討からⅠ期～Ⅴ期に編年し、土器群及び集落を連続的な変遷として捉え早期前半に位置づけた。Ⅰ期はⅠ群1類の表裏縄文土器、Ⅱ群1類、Ⅲ群2類の口唇部及び口縁部内面施文を持つ縄文、撚糸文土器及び口縁部に横走撚糸文を持つⅢ群1類を比定し、Ⅱ期は、Ⅱ群2類の帯状施文の大粒縄文土器とⅢ群3類の口縁部が直行する撚糸文土器を充当した。Ⅲ期は、Ⅱ群3類、Ⅲ群3類の口唇部がやや先細りか角頭状を呈し、口縁部が直行する縄文土器、撚糸文土器及びⅤ群の縦位密接押型文土器を比定し、Ⅳ期

にはIV群の異方向帯状施文土器とVI群無文土器を比定した。表裏縄文系土器群と押型文系土器群の関係は、II群3類、III群3類とV群における口唇部形態、口縁部が直行する器形、縦位密接施文と口縁部内面施文の文様構成などの共通性からIII期に押型文土器の出現期を設定した。関東地方の捺糸文系土器群との関係については特に対比していない。

その後、静岡県内では寺林南遺跡（石川1985）、菖蒲ヶ池A遺跡（漆畑1985）、大平C遺跡（漆畑1986）など若宮遺跡の一部を示す遺跡が報告された。これらの遺跡では、若宮II群、III群の縄文土器、捺糸文土器と押型文土器が伴出するのかが特に問題として取り上げられた。寺林南遺跡では縄文土器と捺糸文土器だけが出土したが、報告では押型文土器の伴出を遺跡の地域差と捉えている。菖蒲ヶ池A遺跡、大平C遺跡を検討した漆畑稔氏は、縄文土器と捺糸文土器だけの時期と押型文土器が伴出する時期の時期差として捉えた。1988年、関野哲夫氏は静岡県全域の押型文土器出土遺跡を集成し、静岡県全体の押型文土器の変遷を検討する中で、若宮遺跡の位置づけを行った（関野1988）。関野氏は、先ずI群の表裏縄文土器をすべて草創期の多縄文系土器群に位置づけ、早期前半のII～V群の土器群とは切り離している。次に、II群、III群を稲荷台式以降稲荷原式、大浦山I式並行に位置づけ、特にIII群の捺糸文土器は関東からの流入または在地の土器が変化したものとして、捺糸文系土器群との関係を積極的に捉えた。押型文土器については、IV群の異方向帯状押型文土器は、帯状施文が乱れている事から沢式より後出と位置づけ、V群の縦位密接押型文土器は、縦刻み原体の使用がある事から近畿地方のネガティブ押型文土器の影響によって成立した土器群と捉え、IV群とV群を並行関係に置いた。結果として、若宮II群・III群・沢式→若宮IV群・若宮V群と編年した。対して、1989年、若宮遺跡の報告者である馬飼野氏は、小松原A遺跡の報告において、若宮遺跡、小松原A遺跡出土土器を「朝顔」状尖底土器と「砲弾」状尖底土器の2種類の器形に分類し、その変化を追う事によって、若宮II群、III群から連続して若宮V群の縦位密接押型文土器が成立する変遷を再び提示した（馬飼野1989）。

一方、他地域における押型文系土器群の研究においても、若宮遺跡出土土器群との関係が徐々にではあるが検討されてきた。1988年、三重県、奈良県の大鼻式を草創期の多縄文系土器群から連続して成立する最古の押型文土器と考え、そこから押型文土器の東への拡散を考える山田猛氏は、若宮遺跡を始めとする東海地方東部の押型文土器は、西からの影響によるものと捉え、三沢西原遺跡や立野式との関係から若宮遺跡を大川式並行に位置づけた（山田1988）。対して、押型文土器を大観した可児通宏氏は、押型文土器の初現を柘原洞窟の捺糸文系土器群前半に係わる表裏縄文土器群に連続する縦位密接施文を主体とする押型文土器に求め、若宮遺跡も同時期の資料として控え目ながらも位置づけた（可児1989）。また、戸田哲也氏は成瀬西遺跡を初めとする、関東地方の捺糸文系土器群稲荷台式新～稲荷原式新段階における若宮III群1類土器を「若宮型」土器として抽出し、若宮III群1類の時期を捺糸文系土器群の中に明確に位置づけた（戸田1989）。

1991年、筆者らは捺糸文系土器群と押型文系土器群の関係を探究する中で、中部地方においては若宮遺跡を中心的な遺跡として取り上げた（宮崎・金子1990）。若宮遺跡出土土器を住居址を中心とする遺構単位の土器出土状況から、表裏縄文系土器群から押型文系土器群への変遷について、おおよそ、I群及びII群1類の表裏縄文系土器群が主体で押型文土器出現以前の第I段階、捺糸文系土

器群との強い影響関係により表裏縄文系土器群が変質し、若宮型捺糸文土器や大粒縄文土器に代表されるようなⅡ群2類・3類、Ⅲ群1～4類の多様な在地の土器群が成立し、併せて、このような状況の中からⅤ群の縦位密接押型文土器が出現する第Ⅱ段階、そして、Ⅴ群の縦位密接押型文土器が主体になる第Ⅲ段階という3段階の変遷を設定し、さらにⅣ群の異方向帯状押型文土器は、Ⅵ群の無文土器とともに、Ⅴ群より若干遅れて出現すると捉えた。そして、若宮遺跡における土器群の変容期である第Ⅱ段階を稲荷台式新～稲荷原式・大浦山Ⅰ式に比定し、関東地方における捺糸文系土器群の変容期と連動するものと考えた。筆者らの考えは、捺糸文系土器群との強い影響関係を認めながらも、Ⅰ群を含めⅡ群、Ⅲ群を表裏縄文系土器群として連続的に位置づけ、その変化の中から、Ⅴ群の縦位密接押型文土器が成立したと考え若宮遺跡出土土器群を連続的な変化として捉えたものである。Ⅰ期におけるⅠ群、Ⅱ群、Ⅲ群の捉え方に違いはあるが、Ⅴ群縦位密接押型文土器の位置づけは、馬飼野、伊藤両氏及び可児氏に近いものである。対して関野氏は、Ⅱ群、Ⅲ群を稲荷原式、大浦山Ⅰ式などの捺糸文系土器群との関係から成立した在地の土器群として捉える点では一致しながらも、Ⅴ群の押型文土器への連続性を否定する点において大きな相違があり、この相違は押型文土器の成立をどこに求めるかに起因しているといえよう。

最近になって、三の原遺跡（山形1991）、広合遺跡（池谷1990・1991）、東大室クズレ遺跡（秋元1992）、尾上イラウネ遺跡（関野1992）と若宮遺跡を考える上で良好な遺跡の報告が相次いだ。三の原遺跡の報文において山形真理子氏は、捺糸文土器と縄文土器を在地系と関東系に分類して稲荷台式古と新の2段階に細分し、縦位密接押型文土器を胎土の類似から稲荷台古・新の各段階に位置づけた。若宮遺跡について直接の言及はないが、捺糸文系土器と在地系土器及び若宮Ⅴ群押型文土器の在り方を示したものである。また、この地域において金堀式（篠原1977）の流入を初めて指摘した。広合遺跡では、三の原遺跡よりも在地色が強い縄文土器、捺糸文土器が纏まって出土し、これらの土器群を池谷信之氏は稲荷台2式期に位置づけた。東大室クズレ遺跡では、異方向帯状施文の押型文土器を主体とする土器群がこの地域では初めて纏まって報告され、若宮Ⅳ群の位置づけを考える好資料となった。続いて、尾上イラウネ遺跡では異方向密接施文の縄文土器、山形押型文土器を主体とする土器群が多量に検出され、縦位密接施文と異方向帯状施文の関係を考える上で絶好の資料となった。報文において関野哲夫氏は、筆者らの考えとは逆に、尾上イラウネ遺跡を異方向帯状施文から縦位密接施文の変化を示す遺跡として捉え、大平A遺跡→尾上イラウネ遺跡→若宮遺跡とその変化を位置づけた。

このように、若宮遺跡出土土器群の類例は静岡県東部を中心に近年急速に増加し、検討も進められてきているが、その位置づけは現在においてもまだ不安定な状況にあるといえよう。若宮遺跡出土土器群を巡る主な争点は、①縄文土器、捺糸文土器の編年の位置づけ、②縄文土器、捺糸文土器と押型文土器の伴出関係及び連続性、③縦位密接施文押型文土器と異方向帯状施文押型文土器との前後関係と変化過程の解釈にあるであろう。しかし、若宮遺跡は数時期にわたる複合した内容を持っているため、土器群の伴出関係を捉える事が容易ではない。周辺遺跡における土器群の様相を検討する事によって伴出関係等を考えながら、土器群の型式学的検討を順次進めていく事が必要であろう。

II 周辺遺跡の様相

小松原A遺跡（第1図）

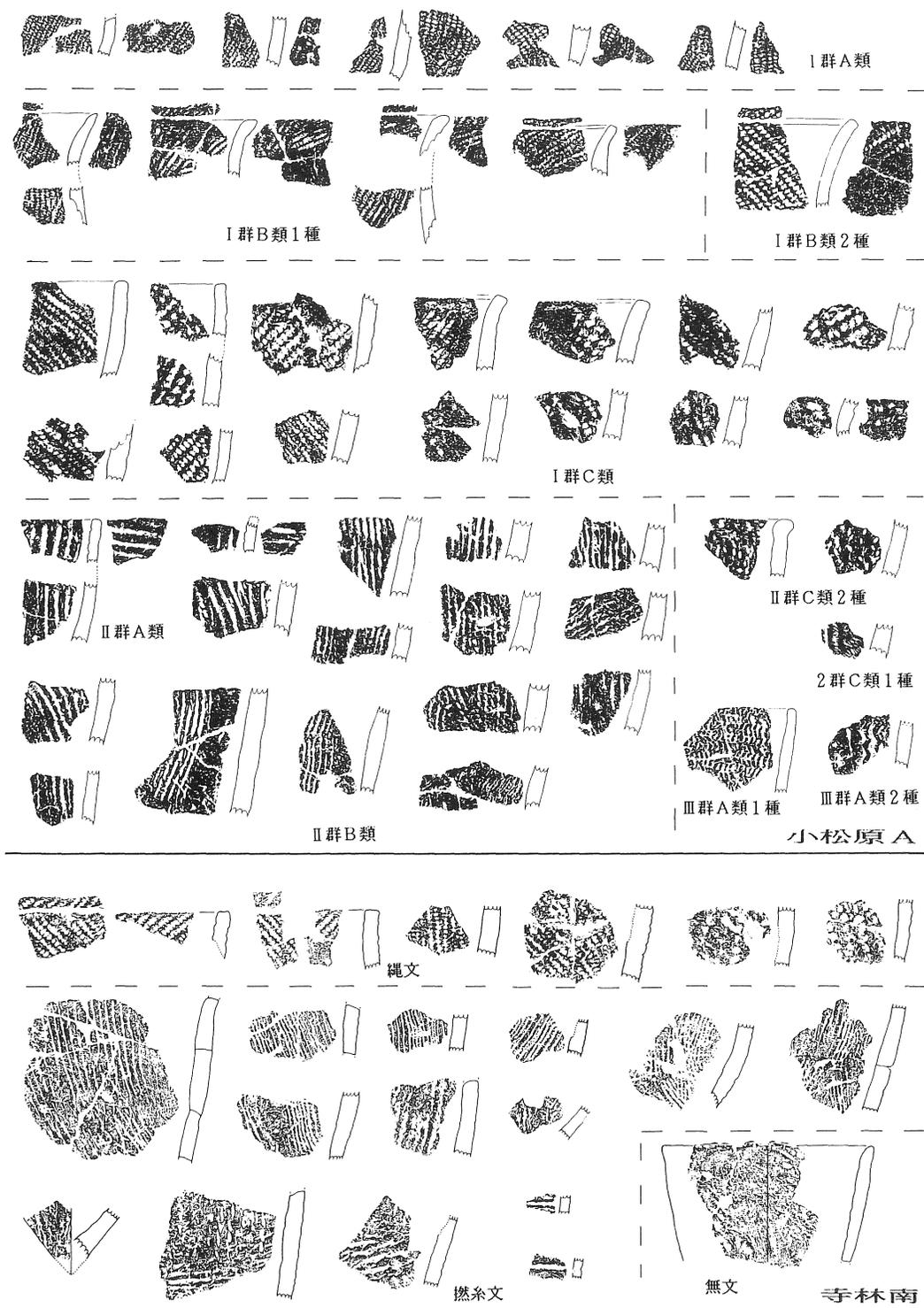
若宮I群、II群1・2類、III群3類、V群1類が出土している。I群縄文土器には、胴部内面にまで施文するA類、口縁部内面施文のB類、大粒縄文のC類がある。I群A類は縄文の節が密で施文が明瞭であり、若宮I群に比定できる。I群B類も節が密で施文が明瞭であり若宮II群1類に類似する。I群A類、B類の縄文原体はLRが多い。I群B類2種の原体はLR Lである。I群C類の大粒縄文土器は原体LRまたはRLを縦位に施文し、帯状の無文部を持つものである。胎土に繊維を含み、若宮II群2類に比定される。II群捺糸文土器には、口縁部内面施文を持ち深い捺糸文のA類、捺糸文を帯状に施文するB類、絡条体圧痕文のC類がある。B類にはI群C類同様帯状の無文部を持つ土器があり、若宮III群2類、3類に類似する。C類1種は絡条体圧痕文により幾何学文を描く胴部破片で、金堀式に比定できる。I群C類、II群A～C類は、胎土に繊維を含み軽しような土器が多く、施文が粗雑であるなどが共通し、ほぼ同時期の土器群と考えられる。III群押型文土器は、山形文が2片出土している。A類1種はやや薄手で縦位密接施文であり、若宮V群1類に類似する。A類2種は軽しような胎土を持つ厚手の土器で、山形文を無文部を持ちながら縦位に施文している。I群C類、II群B類に胎土が酷似しており、縄文、捺糸文の代わりに押型文を施文した土器であり、神奈川県寺谷戸遺跡（鹿島1988）の押型文土器に類似する。これらの押型文土器は、I群C類、II群A～C類とほぼ同時期に捉えられる。

寺林南遺跡（第1図）

若宮II群1・2類、III群3類が出土している。縄文土器は口唇部及び口縁部内面に施文する。縄文は施文がしっかりしているが、大粒縄文もある。原体はLRとRLである。捺糸文土器は条が細く縦走の捺糸文と、条がやや太く横走の捺糸文がある。縄文土器、捺糸文土器とも胎土に繊維を含む。他に無文土器が出土しているが、押型文土器は出土していない。報告者はこれらの土器を押型文土器に伴出するものと捉え、菖蒲ヶ池A遺跡、陣場上遺跡との関係から田戸下層式期に比定しているが、その位置づけはもっと古くなるであろう。

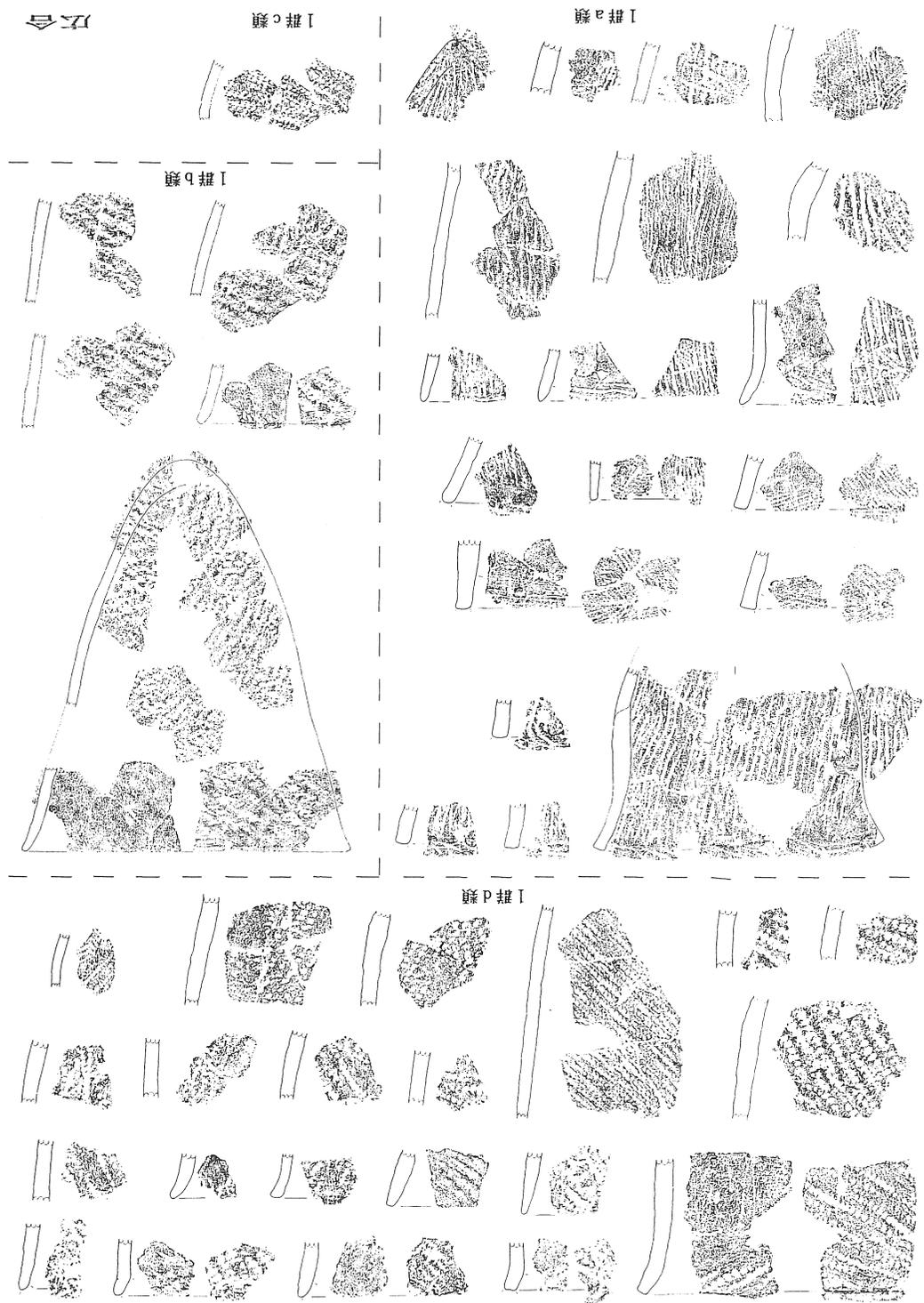
広合遺跡（第2図）

若宮II群2類、III群2・3類が纏まって出土している。1群d類は大粒縄文土器である。LRまたはRLの節が大きい原体を縦位に施文し、口縁部内面にも施文している。胴部には帯状の無文部を持つ土器がある。口唇部形態は角頭状と先細り状の2者がある。胎土には繊維を含み、若宮II群2類に比定される。1群a類は捺糸文土器である。口唇部及び口縁部内面にも施文し、口縁部以下胴部は縦走または斜走捺糸文を施文している。捺糸文の原体はRが主体で、条は太いものと細いものがある。口唇部形態は1群d類同様、角頭状と先細り状の2者がある。胎土に繊維を含み、若宮III群2類、3類に比定される。1群b類は3段RLRを原体に持つ捺糸文である。口唇部内面にも施文している。胎土に繊維を含む。1群c類は2段LRの捺糸文である。1群b類、c類は1群d類の縄文土器と文様構成などが類似する。1群a類～d類の縄文土器、捺糸文土器は、1群a類の中に若干古い様相を残すが、おおよそ一括した資料として把握できる。その他に、横位密接施文の



第1図 小松原A遺跡・寺林南遺跡

第2図 広合遺跡

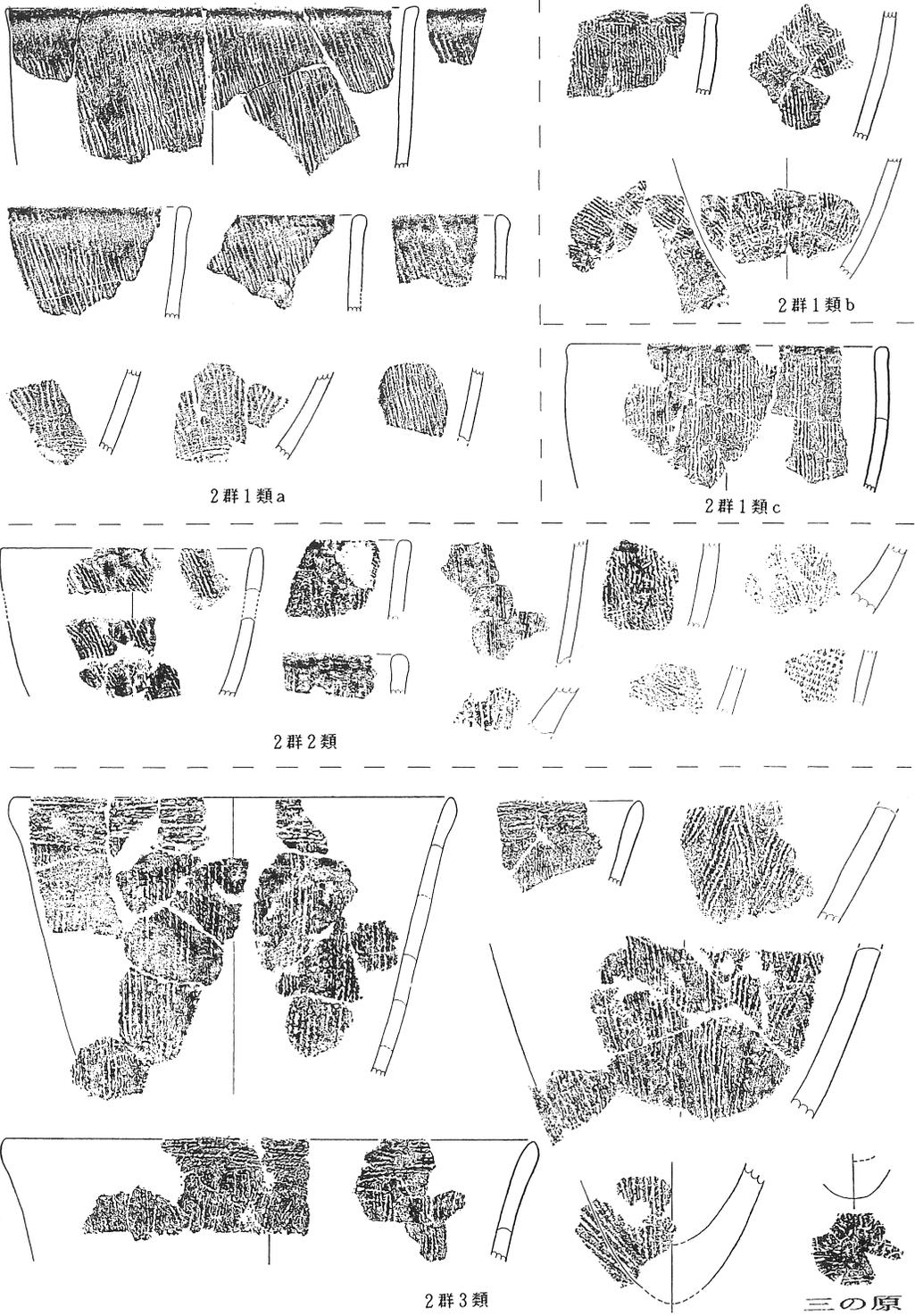


山形文、楕円文、異方向密接施文の楕円文及び格子目文、楕円文とネガティブ文の併施文土器などの押型文土器が出土している。報告書において池谷氏は、1群a類を若宮型捺糸文土器の祖型と考え、1群の縄文土器、捺糸文土器を稲荷台2式に比定している。また1群土器の時期に押型文土器の存在を認めながらも、広合遺跡の押型文土器は出土状況と胎土の違いから1群土器と伴出ししないと捉えている。押型文土器の伴出については不明であるが、若宮II群2類とIII群2類、3類の一部の伴出状況を示す好資料である。

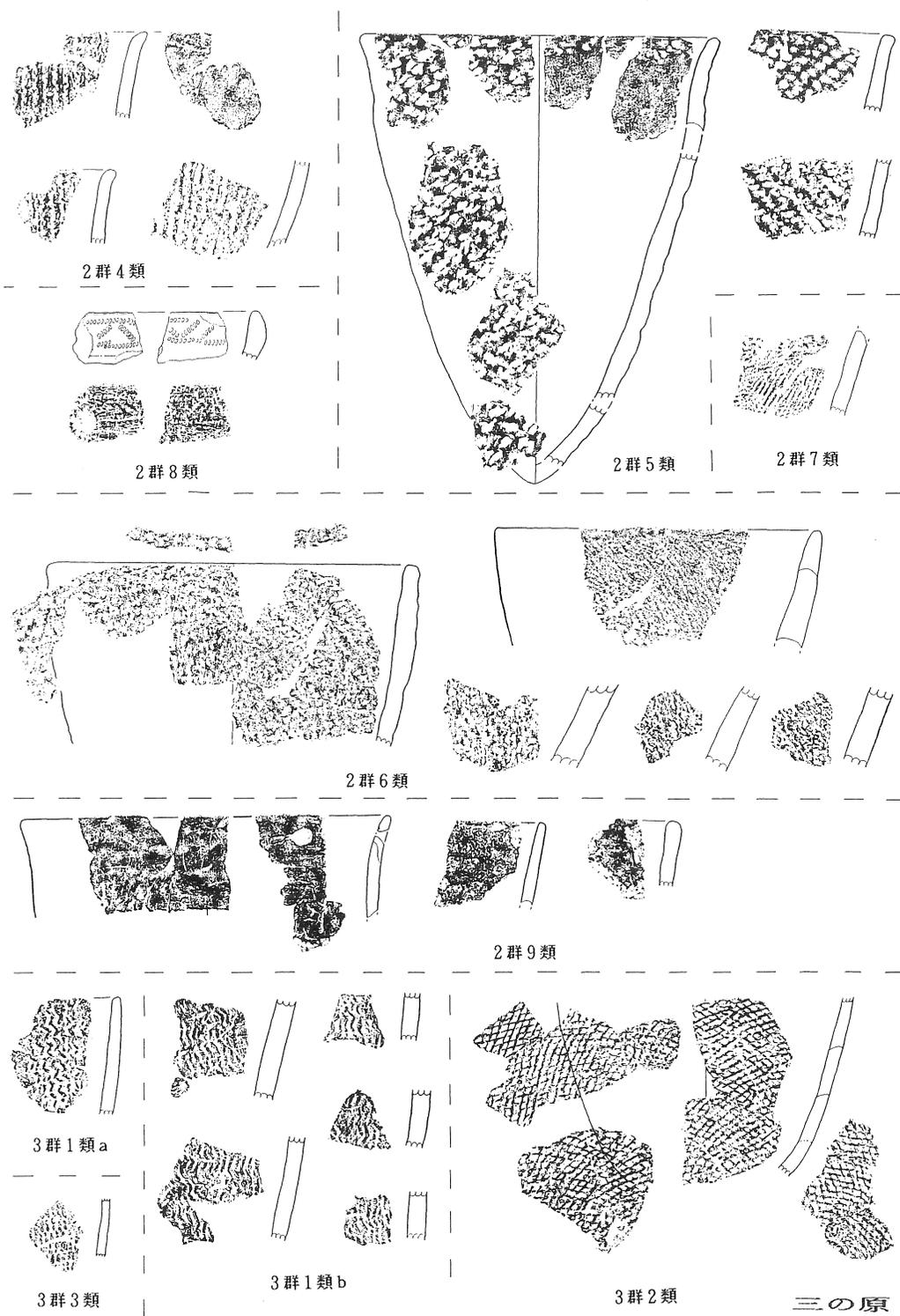
三の原遺跡（第3・4図）

若宮II群2類、III群1類、2類、3類の一部とV群1類、2類が出土している。伊東市という地理的な位置から関東地方との関係をより窺う事ができる。2群1類aは絡条体条痕文土器、2群1類bは口縁部に沈線により区画した狭い文様帯を持ち以下密な捺糸文を施文する土器、2群1類cも密な施文の捺糸文土器である。2群2類は口縁部や胴部に無文部を持つ捺糸文土器、2群3類は口縁部が横位、胴部が縦位の異方向施文の文様構成を取り、軽しような胎土を持つ若宮型捺糸文土器である。2群4類は2段RLの原体による捺糸文土器、2群5類は大粒縄文土器で口縁部内面にも施文している。2群6類は厚い器壁を持つ縄文土器、捺糸文土器、2群7類は繊維を多量に含み深い施文の捺糸文土器、2群8類は絡条体圧痕文により鋸歯状文を描く金堀式土器である。2群9類は2群1類、2類と胎土が類似する無文土器である。3群1類aは軽しような胎土をもつ山形押型文土器、3群1類bは1類a以外の山形押型文土器、3群2類は格子目押型文土器、3群3類は楕円押型文土器である。これらの土器に対して、報告書において山形真理子氏は2群土器のうち、1類、2類、8類は関東地方類似土器、3～7類は静岡県東部の在地土器に分類し、1類・2類の一部を稲荷台式古、2類の一部・8類を稲荷台式新に比定し、4類～7類を稲荷台式古、3類を稲荷台式新に比定している。また、3群の押型文土器は2群土器との胎土の類似から、2群5類に類似する3群1類bを稲荷台式古、2群3類の軽しような胎土に類似する3群1類b、2類を稲荷台式新に伴出するものと位置づけている。三の原遺跡における捺糸文系土器群を見てみると、2群1類と2類を稲荷台式古と新に単純に分離できるか疑問である。2群3類の若宮型捺糸文土器は稲荷台式新～稲荷原式新段階に比定されるが、主体は稲荷原式新段階である。また、2群6類の分厚い捺糸文土器や2群8類の金堀式も稲荷原式新段階に比定される。三の原遺跡は確かに2段階の様相を持つが、稲荷台式新が主体で若干稲荷原式新に入る時期であろう。

小松原A遺跡、広合遺跡、三の原遺跡は、若宮II群2類、III群2類、3類の一部から成り、類似した様相を持っている。三の原遺跡と広合遺跡を比較すると、三の原2群4類・5類は広合1b・1c・1d類に酷似し共通しているが、三の原遺跡では広合1a類の表裏捺糸文土器は少なく、代わりに2群1類・2類など関東地方の捺糸文系土器が主体を占めている。また、三の原2群3類・8類は広合遺跡には存在しない。三の原遺跡は広合遺跡と時期的に重なりながらも若干新しい様相を持っていると把握できる。次に、三の原遺跡と小松原A遺跡を比較すると、大粒縄文土器の2群5類とI群A類、無文部を持つ捺糸文土器の2群2類とII群B類、金堀式の2群8類とII群C類1種及び3群1類とIII群A類の山形押型文土器の在り方など共通性が多い。また、小松原A遺跡II群A類は、広合遺跡よりも若干新しい表裏捺糸文土器である。広合遺跡、三の原遺跡、小松原A遺跡



第3図 三の原遺跡(1)



第4図 三の原遺跡(2)

は、稲荷台式新段階が主体で三の原遺跡、小松原A遺跡は若干稲荷原式新段階にまで入る時期に比定できよう。押型文土器は三の原遺跡、小松原A遺跡で若宮V群1類、2類、3類が少量出土している。稲荷台式新段階の縄文土器、捺糸文土器を主体にして押型文土器が少量伴出する様相は、若宮遺跡4号住居跡、9号住居跡などとも共通しており、稲荷台式新から稲荷原式新に若干かかる段階に押型文土器が出現したと考える事が現在のところ最も妥当であろう。

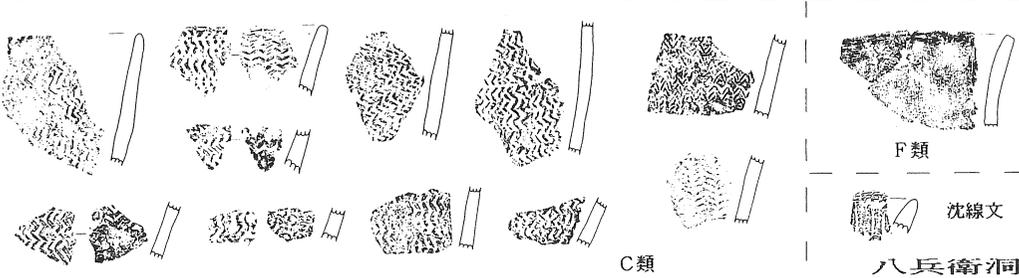
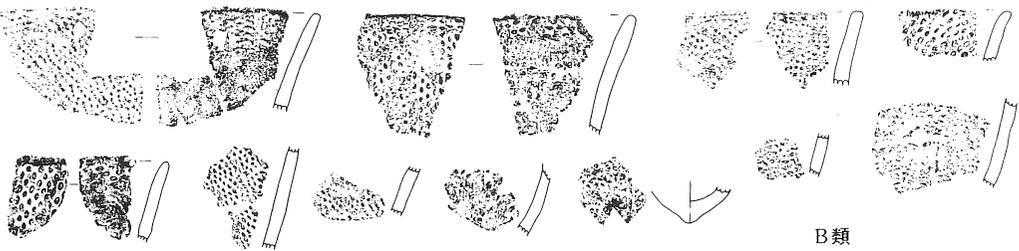
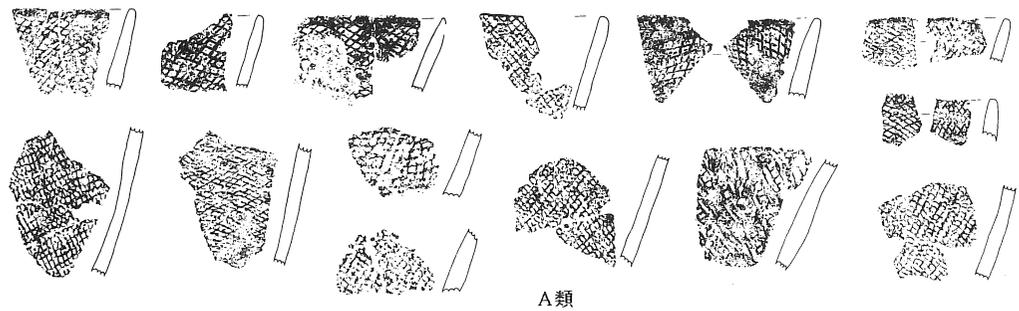
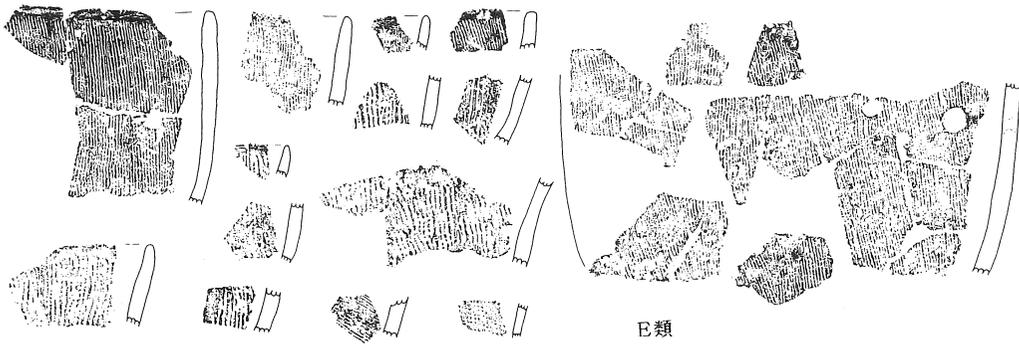
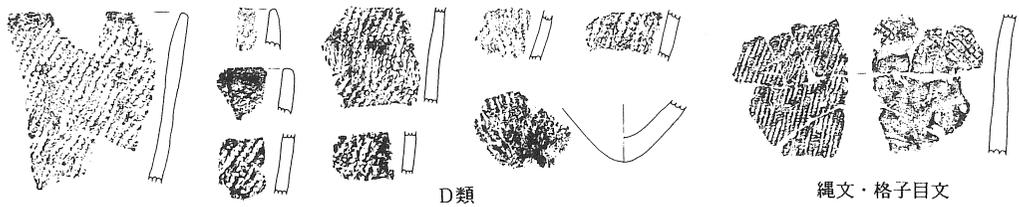
八兵衛洞遺跡（第5図）

若宮II群3類、III群3類、V群1類、2類、3類が出土している。D類は縦走施文の縄文土器で、原体はRLが多い。口唇部、口縁部内面への縄文施文は見られないが、口縁部内面に格子目押型文を施文した併施文土器が1点存在する。縄文と格子目押型文の置換関係を示す土器として注目される。D類は若宮II群3類に比定できる。E類は原体Rの捺糸文を縦位に施文した捺糸文土器である。縦位、横位に施文し交差している捺糸文土器も数片見られる。口唇部は縄文土器同様先細り状で直線的に立ち上がる。胎土には繊維を含んでいる。若宮III群3類に比定できる。A類は格子目押型文土器である。縦位密接施文が主体である。口縁部内面施文の土器が約半数を占めている。若宮V群2類に比定できる。B類は楕円押型文土器である。口縁部に幅が狭いが横位の文様帯を1段持ち、以下縦走あるいは斜走施文する土器が主体である。口縁部内面にも施文している。若宮V群3類に類似しているが、若宮V群3類は口縁部から縦走密接施文が主体であり、八兵衛洞遺跡の楕円押型文土器は若干新しい様相を持つといえる。C類は山形押型文土器である。縦位密接施文が主体であるが、横位密接施文の土器も少量存在する。口縁部内面施文も見られる。若宮V群1類に比定される。これらの押型文土器はいずれも口唇部が先細りの角頭状を呈し、直線的にやや開きぎみに立ち上がっている。胎土に繊維を含んでいる。押型文土器の組成比率は、おおよそ格子目文50%、山形文25%、楕円文25%で格子目文が主体的である。格子目文が主体を占める文様組成は若宮遺跡と類似しているが、若宮遺跡よりも楕円押型文土器が多い。その他に無文土器と沈線文の土器が数片出土している。

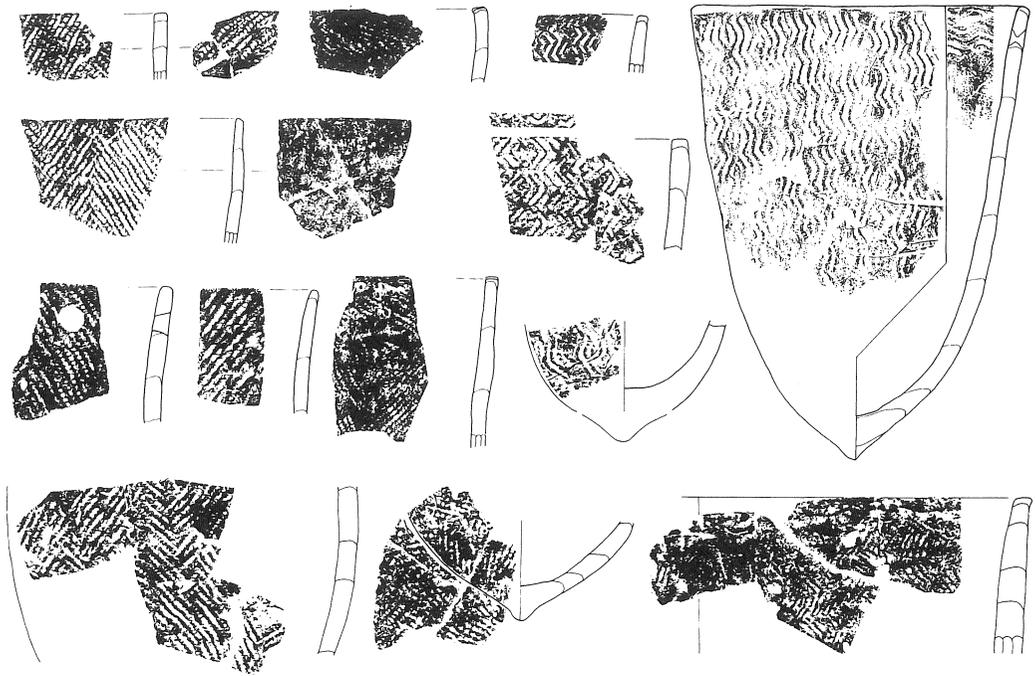
八兵衛洞遺跡の土器群は、器形、施文手法及び胎土の類似から、一括してほぼ同一時期の土器群として把握されている。縄文土器、捺糸文土器を、広合遺跡、三の原遺跡、小松原A遺跡と比較すると、これら3遺跡で主体となる若宮II群2類、3群1類、2類は無く、若宮II群3類、III群3類が主体で単純な様相をもち、より新しく位置づけられよう。押型文土器は文様が多様化し、縄文土器、捺糸文土器に代わり主体を占めている。押型文土器は楕円押型文土器の中に、口縁部に横位文様帯を持つ異方向密接施文もあるが、縦位密接施文の若宮V群が主体である。八兵衛洞遺跡は、若宮V群の縦位密接押型文土器が主体になる時期の様相を示している。

尾上イラウネ遺跡（第6図・7図・8図）

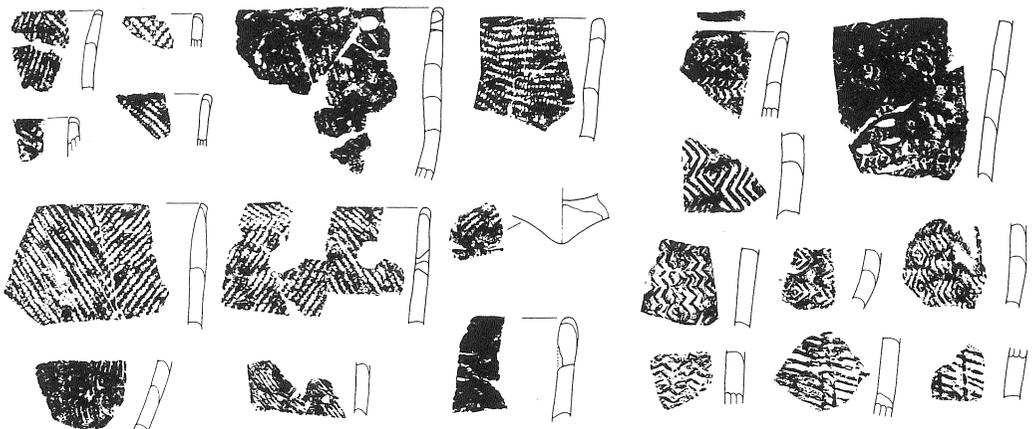
若宮II群3類、V群1類、2類、4類、VI群が出土している。該期の土器群は三群に分類されている。三群のうちA類縄文土器が60%近くを占め主体を成している。三群A類の縄文土器は、色調が赤褐色の1～4種と灰褐色の5～8種に大きく2分類されている。両者は胎土が異なるが、器形、文様などが共通している。1・5種、斜縄文土器、2・6種、異方向施文の羽状縄文土器、3・7種、帯状に磨消した無文部を持つ縄文土器、4・8種、縄文が横走する土器である。これら縄文土



第5圖 八兵衛洞遺跡

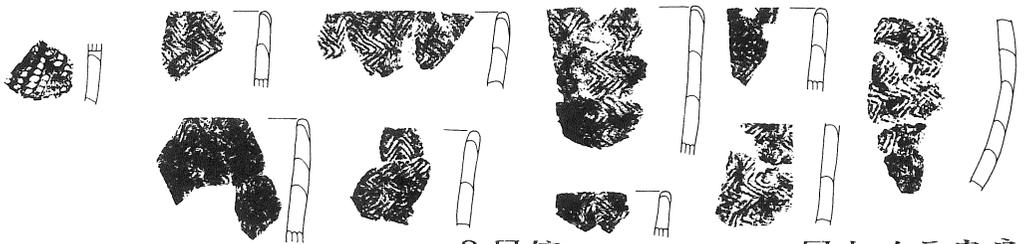


1号住



燃糸文・山形文

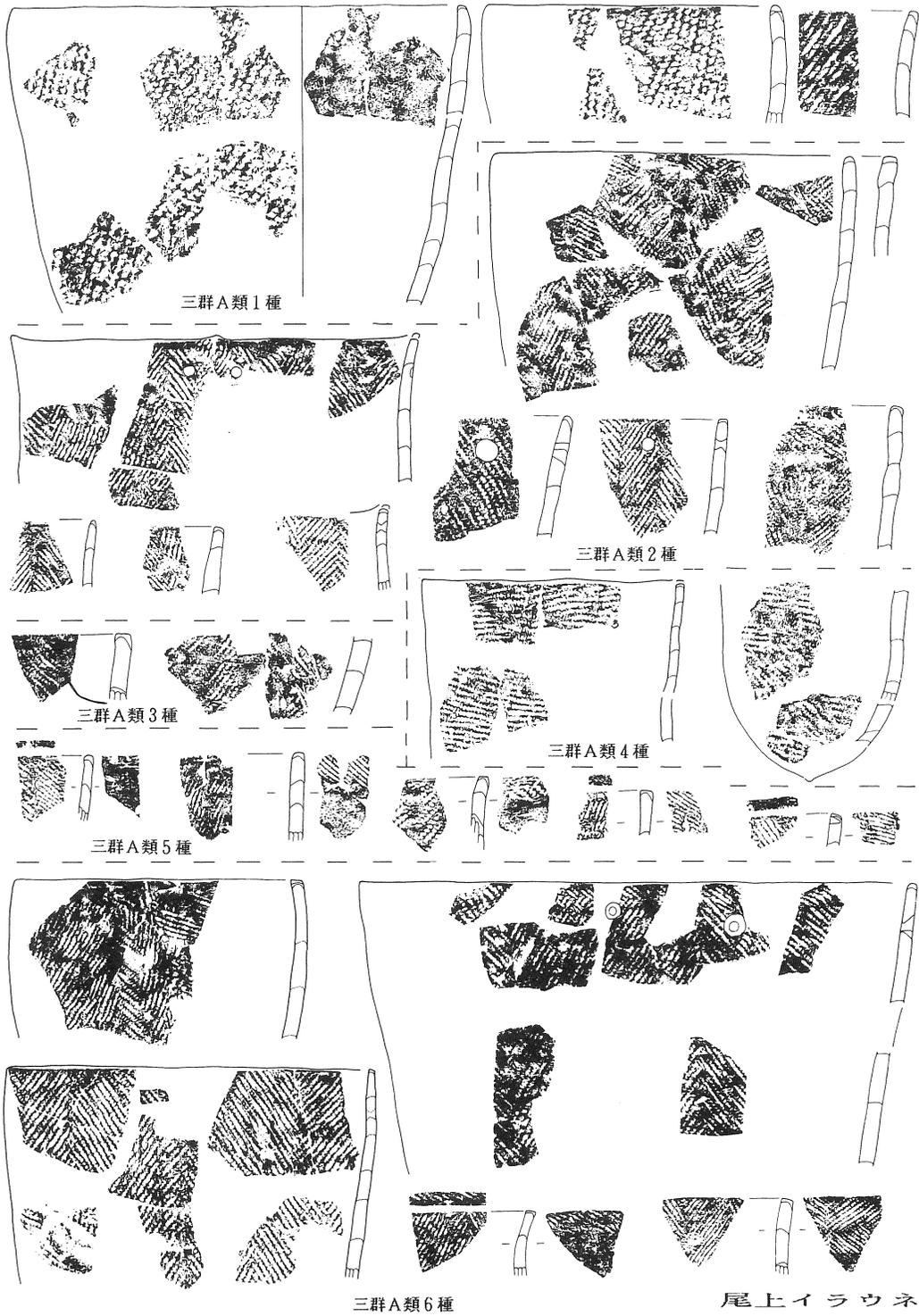
2号住



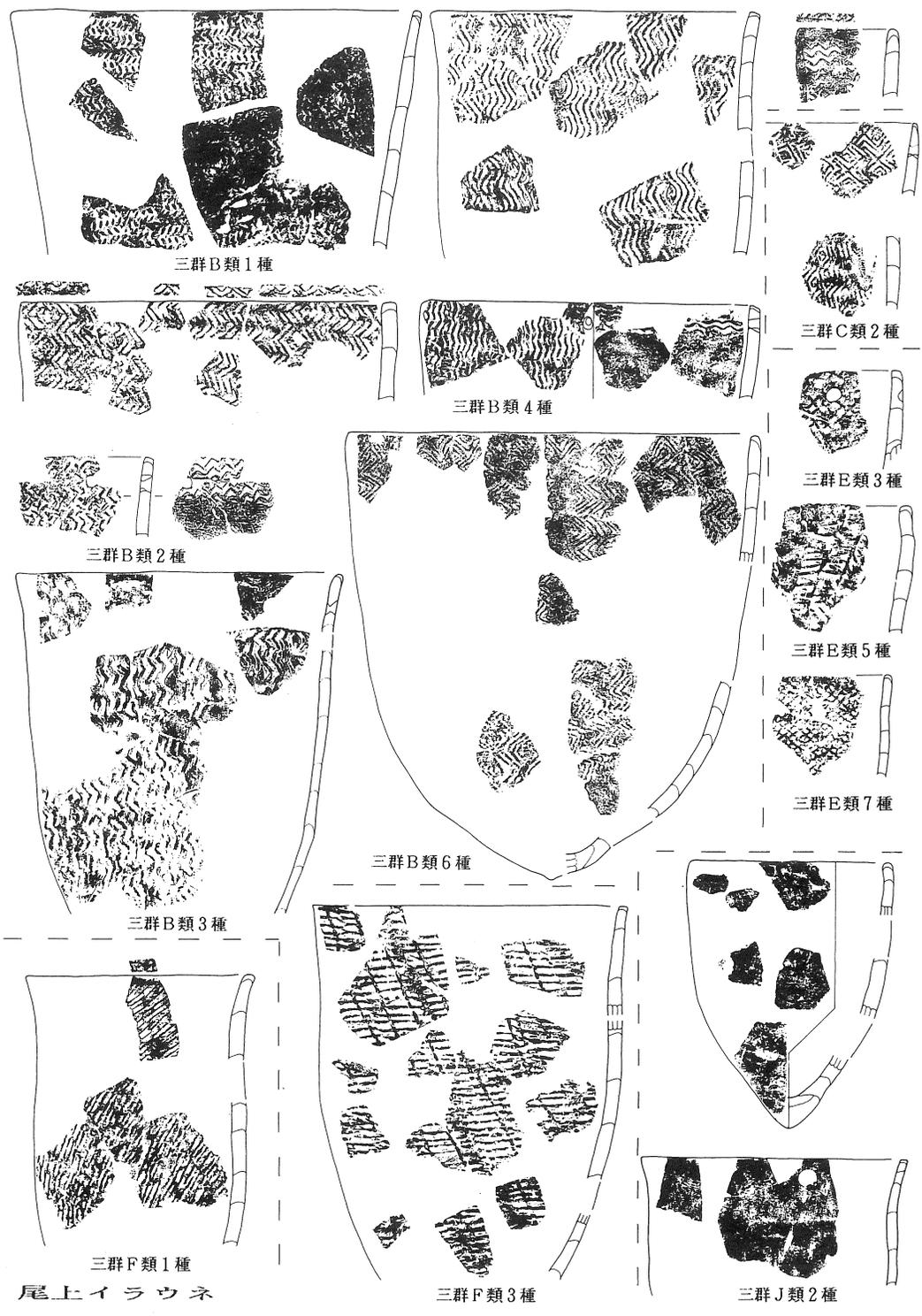
3号住

尾上イラウネ

第6図 尾上イラウネ遺跡(1)



第7図 尾上イラウネ遺跡 (2)



第8図 尾上イラウネ遺跡 (3)

器は、口唇部が角頭状を呈し、器形は直線的あるいは若干内傾して立ち上がる。文様は、原体L RとR Lの2者を使用したり、異方向施文により羽状縄文を作るなど、縄文施文を発達させた特徴を持っている。若宮遺跡と比較すると、口唇部形態や器形及び、縄文の節の細かさなどから、若宮II群2類より3類に類似している。若宮II群3類にも口縁部に横位文様帯を持つ異方向施文の縄文土器や、斜縄文土器があり、尾上イラウネ遺跡の縄文土器は、若宮II群3類がより文様化した縄文土器と考えられる。また、4種の横走縄文は、大浦山I式類似の若宮III群5類横走撚糸文を縄文化したものであろう。

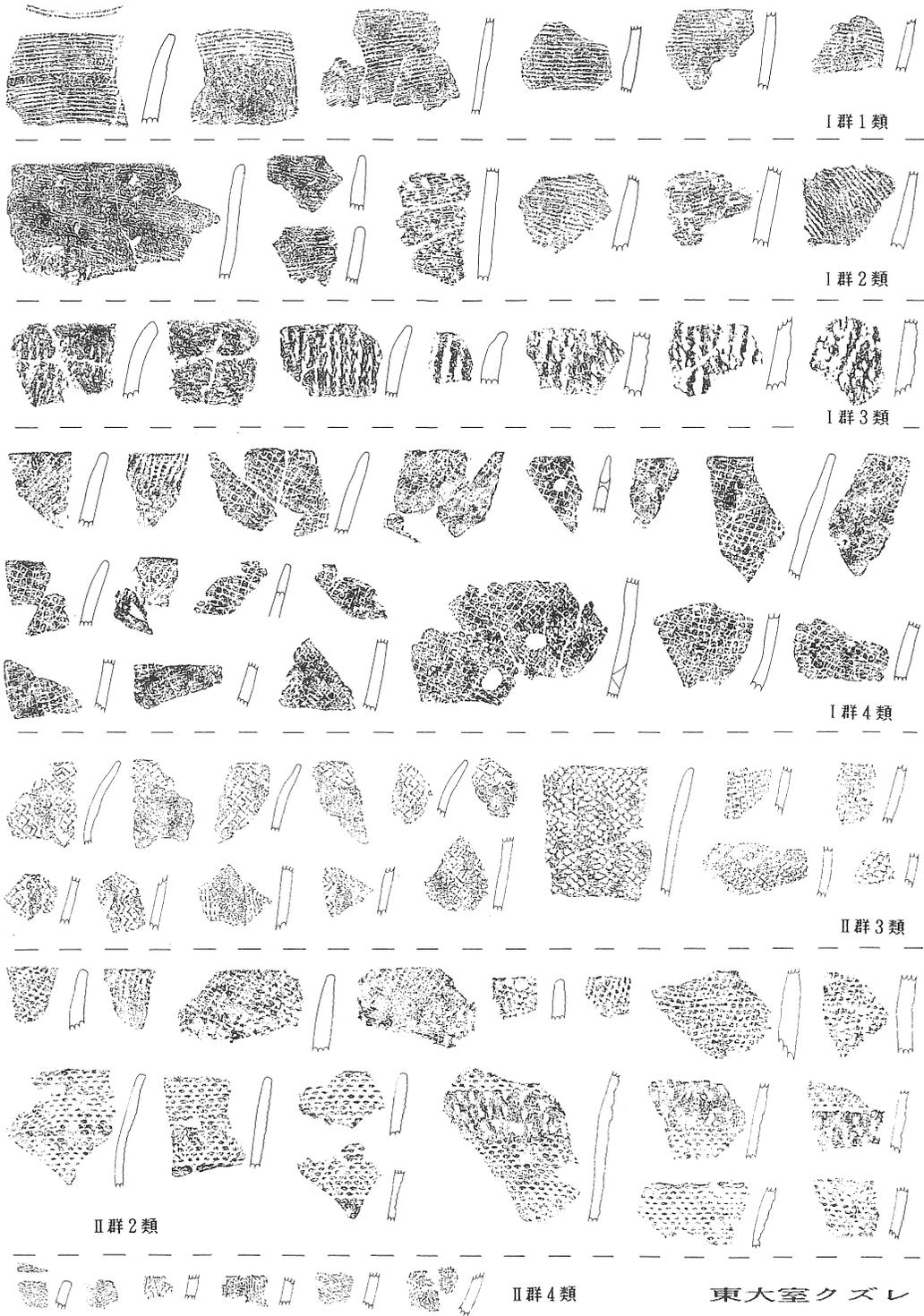
次に多いのがB類山形押型文で約30%近くを占めている。押型文土器の中では、山形文は約70%近くを占め、主体となっている。A類同様、色調が赤褐色から黒褐色の1～3種と灰褐色の5～7種に2分類されている。1・4種は縦位密接施文、2・5種は横位密接施文、3・7種は異方向密接施文、6種は縦位に磨消しの無文部を持つものである。山形文は全体的に一山の波長が長く大ぶりの山形文が特徴的である。若宮遺跡でも大ぶりの山形文が特徴的であるが、その傾向が一層顕著である。また、若宮遺跡には見られない異方向密接施文が相当量存在する事が注目される。C類は山形文の空白部に二重の菱形文を入れた菱目文、D類はC類に類似する入り組み状の山形文である。菱目文は若宮V群4類に類例がある。E類は格子目文である。異方向密接施文があり、大ぶりの格子目文が特徴である。F類はE類に類似する線状の押型文である。E類、F類も若宮V群4類に類例があるが、格子目文の単位が大きい事が特徴である。G類は楕円文状山形文、H類は撚糸文、I類は併施文土器であるが、いずれも量は少ない。J類は無文土器であり、A類縄文、B類山形文に次いで量が多い。

尾上イラウネ遺跡と若宮遺跡を比較すると、その相違は以下のようになる。

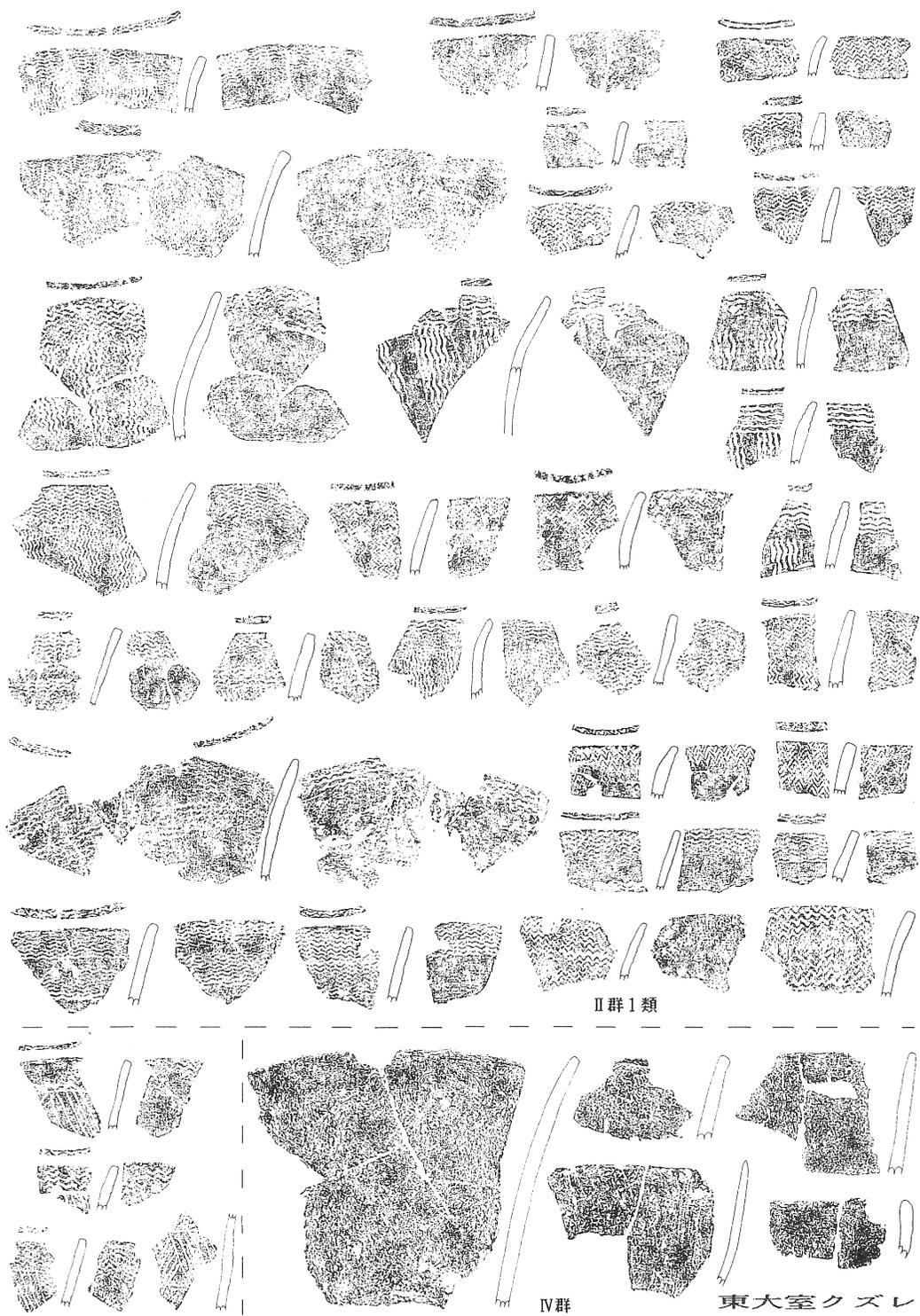
- ① 土器組成において、若宮遺跡は押型文土器が圧倒的に主体を占めているが、尾上イラウネ遺跡は押型文土器と口唇部形態、器形が類似する縄文土器が主体を占める。
- ② 押型文土器の組成では、若宮遺跡は格子目文が50%近くで主体を占め、尾上イラウネ遺跡は山形文が70%近くで主体を占めている。
- ③ 押型文土器は、大ぶりの山形文、菱目文、格子目文、線状格子目文など文様の多様性においては共通しているが、文様構成においては若宮遺跡は縦位密接施文が圧倒的に多いが、尾上イラウネ遺跡は縦位密接施文とともに異方向密接施文が主体になっている。
- ④ 尾上イラウネ遺跡では無文土器の存在が若宮遺跡よりも量が多く顕著である。

このような相違を持つ若宮遺跡と尾上イラウネ遺跡について、報告書において関野氏は尾上イラウネ遺跡から若宮遺跡へ、異方向密接施文から縦位密接施文への変化として捉えたが、筆者らは逆に若宮遺跡から尾上イラウネ遺跡へ、縦位密接施文から異方向密接施文への変化を示す遺跡として把握したい。尾上イラウネ遺跡の押型文土器を見ると、若宮遺跡と類似しながらも文様が粗大化し、縦位密接施文の文様構成を持つなど斉一性が無くなっている。また、尾上イラウネ遺跡で主体となる縄文土器は、関東地方の花輪台式との影響関係が窺え、縄文土器が持つ羽状縄文など異方向施文の文様性が、押型文土器の異方向縦位密接施文を成立させたと考えたいのである。

東大室クズレ遺跡（第9・10図）



第9図 東大室クズレ遺跡 (1)



第10図 東大室クズレ遺跡 (2)

若宮IV群の異方向帯状施文土器が纏まった資料である。山形文が全体の約80%を占め主体である。I群1類は横走撚糸文土器、I群2類は横走及び斜走撚糸文土器である。1類、2類とも原体はRの条が細い撚糸文である。I群3類は条が太い縦走撚糸文土器、I群4類は網目状撚糸文土器である。これらの撚糸文土器は、若宮III群3類、4類、5類に類似するが、網目状撚糸文はやや粗雑である。II群3類は格子目押型文土器である。口縁部及び口縁部内面に1段横位施文し、口縁部以下は無文部を持って縦位帯状施文している異方向帯状施文土器である。II群2類は楕円押型文土器である。口縁部以下横位帯状に数段施文し、口縁部内面にも施文している。横位文様帯間の無文部に刺突文を充填する土器もある。II群4類は綾杉状押型文土器である。II群1類はこの遺跡で主体となる山形押型文土器である。異方向帯状施文が大部分である。口縁部に横位1帯または2帯施文し、以下縦位帯状施文する。口縁部内面にも横位1帯施文と2帯施文がある。また、口縁部横位2帯間の無文部や胴部縦位施文の無文部の幅が狭く、異方向密接施文となる土器や、口縁部の横位2帯間の無文部に鋸歯状に沈線文を充填している土器もある。いずれも異方向帯状施文のバリエーションである。無文部が広い異方向帯状施文は無く、密接傾向が強く全体的に斉一性が高い。若宮IV群1～3類に類似している。IV群は無文土器である。口唇部は角頭状を呈し、器面は丁寧に削られている。若宮VI群に類似し平坂式に比定される。東大室クズレ遺跡は、異方向帯状施文の文様構成を主体にする押型文土器として斉一性が高く、纏まった時期の土器群と捉えられ、おおよそ樋沢式に比定できよう。

東大室クズレ遺跡を尾上イラウネ遺跡と比較すると、その相違は以下のとおりである。

- ① 東大室クズレ遺跡では、尾上イラウネ遺跡で主体となる縄文土器が無く、異方向帯状施文の押型文土器が主体になり、無文土器が増加している。
- ② 文様構成は、尾上イラウネ遺跡は縦位密接施文と異方向密接施文が主体であるが、東大室クズレ遺跡は異方向帯状施文が主体である。
- ③ 押型文は、尾上イラウネ遺跡は山形文を主体にしながらも菱目文、格子目文など文様が多様化しているが、東大室クズレ遺跡は山形文が大部分を占め、斉一性が高い。

尾上イラウネ遺跡の異方向密接施文の土器群が、無文土器の影響と山形文の卓越化により、東大室クズレ遺跡の異方向帯状施文の土器群へと変化したと考えられ、尾上イラウネ遺跡→東大室クズレ遺跡という変遷を辿る事が可能であろう。

以上、若宮遺跡周辺の主な遺跡の様相を検討してきた。これらの遺跡は、若宮遺跡が数段階の変遷を持つ継続的な遺跡であるのに対して、比較的短期的で纏まった資料と捉えられる遺跡である。これらの遺跡は、大枠として、広合遺跡・小松原A遺跡・三の原遺跡→八兵衛洞遺跡・尾上イラウネ遺跡→東大室クズレ遺跡の変遷が想定できる。この変遷は、前稿において設定した若宮遺跡のII段階→III段階→IV段階（若宮IV群）に比定され、関東地方の撚糸文系土器群との関係では、稻荷台式新・稻荷原式古→稻荷原式新・大浦山I式・花輪台式古→東山式・花輪台式新・平坂式古の変遷におおよそ対比され、両者は連動した変遷として把握できる。次に、このような変遷観を基本にして、改めて若宮遺跡の出土土器群を検討して、各段階を整理しておきたい。

III 若宮遺跡出土土器群の変遷

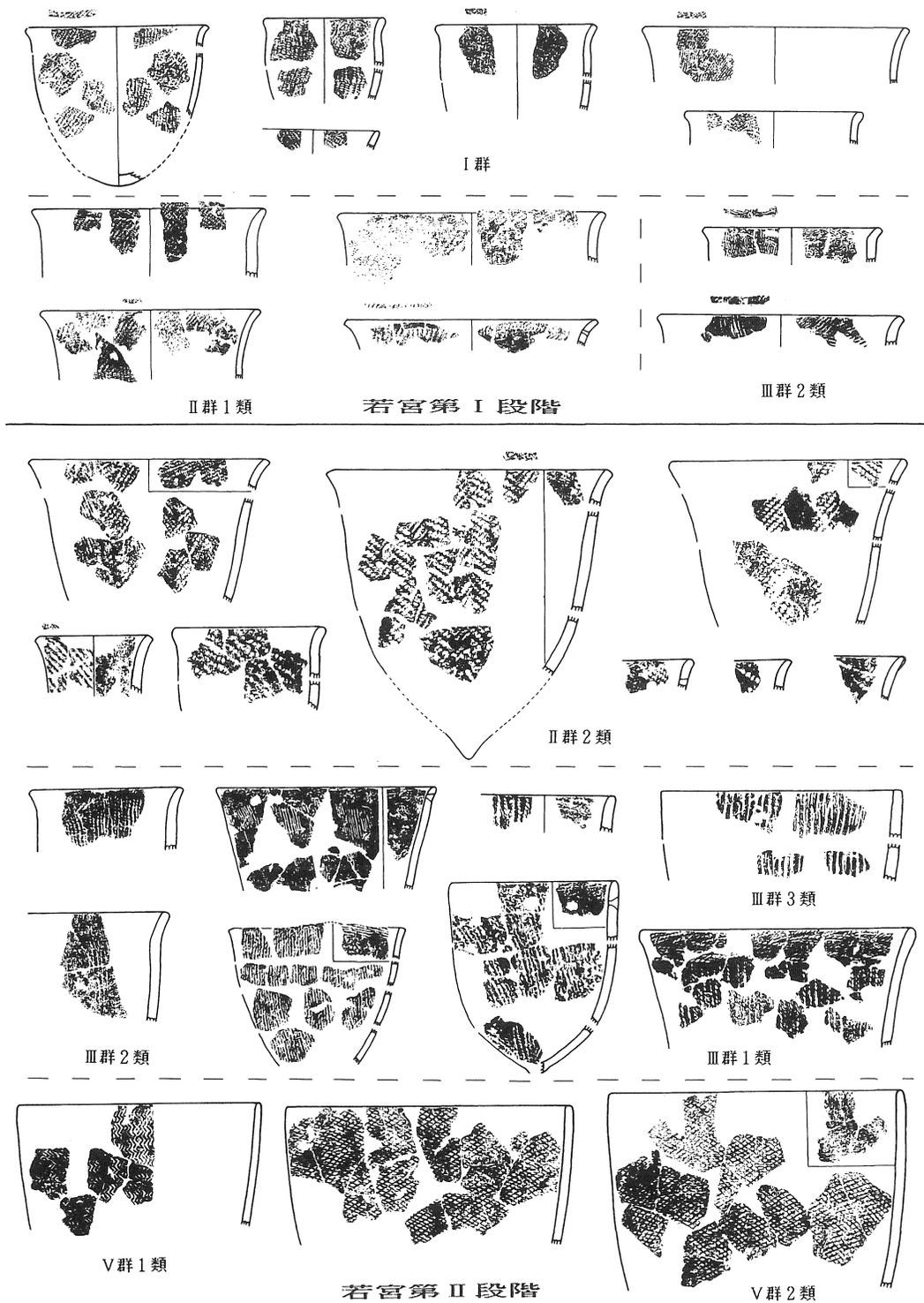
前稿では若宮遺跡出土土器を表裏縄文系土器群と押型文土器の遺構における出土状況から、大枠として、I 段階 押型文土器出現以前表裏縄文系土器段階、II 段階 押型文土器成立表裏縄文系土器群主体段階、III 段階 V 群縦位密接押型文土器主体段階の 3 段階に細分し、さらに、IV 段階 IV 群異方向帯状押型文土器段階を含め全体として 4 段階に細分した。前述してきたように、周辺遺跡の様相を検討した結果はこの段階設定を肯定するものであり、その内容を補強するものになった。若宮遺跡出土土器を段階的に整理し、その変化を追いながら静岡県東部における土器群の変遷を辿ってみたい。

若宮第 I 段階 (第11図)

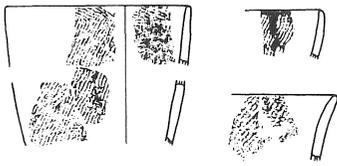
押型文土器出現以前である。関東地方の井草式～夏島式に対比される。若宮 I 群、II 群 1 類、III 群 2 類の一部が比定される。草創期以来の表裏縄文土器の系統が続いており、内面施文が胴部にまで及ぶ I 群と口縁部内面だけの II 群 1 類、III 群 2 類がある。静岡県における井草式～夏島式に対比される土器群は現在明確になっていないが、近年になって、井草 I 式の資料が三の原遺跡、大谷津遺跡(鈴木他1990)などで検出されている。三の原遺跡では大谷寺 III 式段階の表裏縄文土器群に後続して、井草 I 式が出土しているが、伴出する在地の土器は表裏縄文土器群の新相を持つ土器が数点抽出されただけである。大谷津遺跡でも井草 I 式が検出されているが、伴出する在地の土器は明らかではない。清水柳北遺跡(関野1990)、中見代 I 遺跡(高野1989)、小松原 A 遺跡では、若宮 I 群及び II 群 1 類に類似する口唇部が角頭状を呈し外反する表裏縄文土器が出土しているが、井草式～夏島式との関係は不明である。一方、大平 C 遺跡(漆畑1986)では若宮 III 群 2 類に類似する口唇部施文を持ち節と条を明瞭に施文する撚糸文土器が出土している。井草 II 式は井草 I 式の肥厚する口唇部のように顕著な特徴がないため、これらの土器を直ちに井草 II 式あるいは夏島式に比定する事は難しいが、第 II 段階以降における稲荷台式以降の撚糸文系土器群の影響による在地土器群の撚糸文化の先駆けと考える事も可能であろう。今後の資料の増加により、井草 I 式、II 式、夏島式に対比できる細分が期待される。

若宮第 II 段階 (第11図)

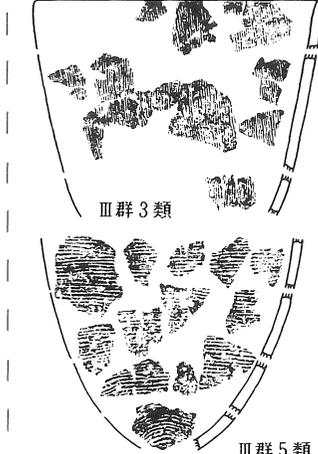
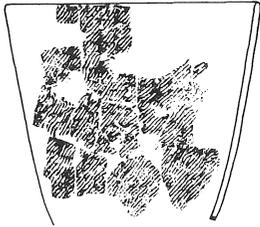
押型文土器出現期である。関東地方の稲荷台式古～稲荷台式新・稲荷原式古及び一部稲荷原式新に対比される。前稿では稲荷台式古は第 I 段階新としたが、この地域では稲荷台式古、稲荷台式新・稲荷原式古及び稲荷原式新の分離が難しいため第 II 段階として包括した。若宮 II 群 2 類、III 群 1～3 類、V 群 1、2 類の一部が比定される。関東地方撚糸文系土器群の影響が強く波及し、在地系土器群が大きく変容する段階である。第 I 段階 II 群 1 類の表裏縄文土器は II 群 2 類の大粒縄文土器になる。II 群 2 類は原体が太く節が大きい縄文が特徴的であり、複節の縄文はその傾向を最も良く示している。縦位施文が中心で、斜縄文、羽状縄文、磨り消し部を持つ帯状縄文がある。III 群 1～3 類は、稲荷台式に類似する土器、第 I 段階 III 群 2 類に連続する表裏撚糸文土器、口縁部に横走撚糸文を持つ若宮型撚糸文土器がある。撚糸文の原体は R が主体で条が太く施文は粗雑であり、口縁部または胴部に磨り消し部を持つ土器もある。これらの縄文土器、撚糸文土器に見られる、縦位施文、



第11図 若宮遺跡 (1)

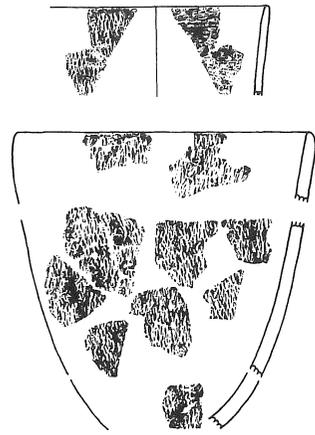


II群3類

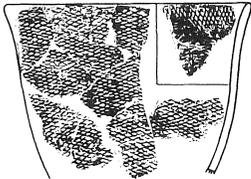


III群3類

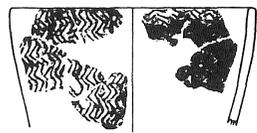
III群5類



III群4類



V群2類



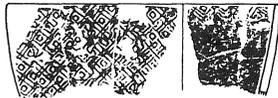
V群1類



V群3類



V群4類



V群4類



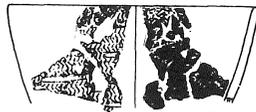
V群1類



V群5類

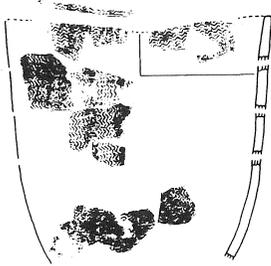


V群3類

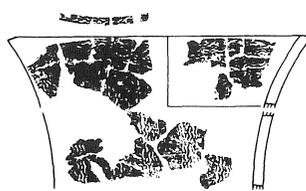


V群1類

若宮第III段階



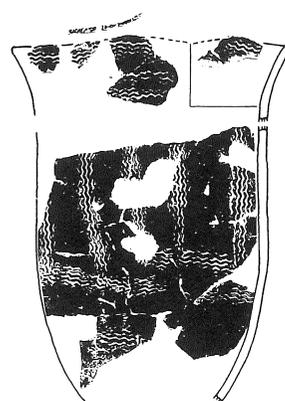
IV群



VI群



若宮第IV段階



第12図 若宮遺跡(2)

帯状の磨り消し、原体の大形化などはいずれも稲荷台式古→稲荷台式新・稲荷原式古→稲荷原式新の変化に対応し、その影響に因るものと考えられる。若宮遺跡、三の原遺跡、小松原A遺跡で出土している若宮型撚糸文土器や絡条体圧痕文の金堀式は、関東地方南部と共通する稲荷台式新～稲荷原式新段階特有の土器であり、両地域の密接な関係が窺われる。また、Ⅲ群1類・3類の撚糸文土器の器形に口縁部が内傾する砲弾形器形の出現や軽しような胎土に代表される胎土の開発も、稲荷台式新・稲荷原式古～稲荷原式新への変化に対応しており連動した変化と把握できよう。このように、第Ⅱ段階の縄文土器、撚糸文土器は、表裏施文手法というこの地域の伝統を残しながらも、撚糸文土器群の影響を強く受けて変容した在地の土器群として位置づける事ができよう。若宮遺跡の他に、広合遺跡、小松原A遺跡、三の原遺跡で纏まって出土しており、この段階の土器群として把握する事が可能である。

問題はこの段階に押型文土器がどのように係わるかであろう。若宮遺跡では4号住居跡、9号住居跡において山形文と格子目文が少量出土している。小松原A遺跡で山形文、三の原遺跡では山形文、格子目文、楕円文が少量出土している。いずれも縦位密接施文の若宮V群に比定される。三の原遺跡では胎土の類似から、山形文と格子目文をこの段階の押型文と位置づけているが、大平C遺跡、広合遺跡では押型文土器の伴出は認められていない。このように、縄文土器、撚糸文土器が主体で押型文土器が客体的に少量出土する遺跡の在り方は、関東地方における寺谷戸遺跡、多摩ニュータウンNo.205遺跡(原川1982)、二宮森腰遺跡(土井1974)、石神遺跡(鈴木1977)など稲荷台式新・稲荷原式古～稲荷原式新段階の遺跡の在り方と共通するものであり、両地域の状況からこの段階における押型文土器の伴出を認める事が可能であると思われる。撚糸文化の増大に伴う、器形、胎土、文様手法など在地系土器群の大きな変化の中において、撚糸文と同様棒状原体を回転する押型文手法が開発され、縄文や撚糸文に置換した形で施文した縦位密接施文の押型文土器が出現したと考えられる。山形文は撚糸文、格子目文は縄文、楕円文は網状撚糸文を模したものであろう。その後、第Ⅱ段階から第Ⅲ段階にかけて、押型文は主体的文様になるとともに原体に色々な工夫が施され、若宮V群に示されるような原体が多彩な押型文土器が成立したと思われる。若宮遺跡では第Ⅱ段階から第Ⅲ段階の押型文土器は連続的であるため分離が難しいが、若宮遺跡、三の原遺跡、小松原A遺跡における出土状況や縄文、撚糸文への置換を考えると、V群1類山形文、2類格子目文のうち原体や施文手法に変化が少ないものが、より古く第Ⅱ段階に位置づける事ができよう。

若宮第Ⅲ段階 (第12図)

押型文土器確立期である。関東地方の稲荷原式新・大浦山I式、花輪台式古に対比される。若宮Ⅱ群3類、Ⅲ群3～5類、V群1～5類が比定される。第Ⅱ段階で出現した押型文土器が主体的な文様になり、原体が工夫されて多彩な押型文土器が成立する。このような原体が多彩な押型文は、若宮V群と尾上イラウネ遺跡に良く示されている。山形文は原体が太い大ぶりの山形文、山形文を向かい合わせ中に格子目を入れた菱目文、縦刻み原体で縦位施文の山形文、格子目文は線状に刻みを入れて方形、長方形、菱形などの文様を作り出している。さらに、山形文、格子目文、楕円文の原体に縦に線状の刻みを入れて、原体により表出される一層多彩な押型文を作り出している。このような多彩な原体の開発に併せて、文様施文方向は縦位密接施文がなお主流であるが、口縁部に横

位施文を持つ異方向密接施文が成立してくる。異方向密接施文の構成は、若宮遺跡では若宮型撚糸文土器の他、II群3類縄文土器、山形押型文土器、楕円押型文土器の一部に見られるだけで、少数派であるが、尾上イラウネ遺跡では縦位密接施文とともに異方向密接施文が顕著になっている。尾上イラウネ遺跡では若宮II群3類の縄文土器が主体を占め、縄文による羽状縄文などの文様化を発達させることによって、異方向密接施文の文様構成を作り出したと考えられる。縄文土器における異方向密接施文という文様構成の変化が、押型文土器に採用されて、異方向密接施文の押型文土器が成立したと考えられる。この段階における異方向密接施文押型文土器は、口縁部文様帯幅が狭い事も特徴的である。また、尾上イラウネ遺跡では無文土器が増加傾向を示しており、このような縄文土器の卓越と文様化及び無文土器の増加は、花輪台貝塚（吉田1988）や鶴崎貝塚（西村1960）など関東地方における花輪台式古から新への変化に類似している。さらに、大浦山I式の横走撚糸文を縄文に置換した土器の存在も、関東地方との関係を示している。尾上イラウネ遺跡における縦位密接施文から異方向密接施文への変化においても、関東地方との影響関係が想定できるであろう。

尾上イラウネ遺跡では縄文土器が卓越しているが、在地的な遺跡としては八兵衛洞遺跡の様相が一般的であると思われる。縦位密接施文の縄文土器、撚糸文土器、押型文土器を主体にして、異方向密接施文の押型文土器が少量出土している。また、三沢西原遺跡（水島1985）は尾上イラウネ遺跡に類似する線状格子目文や縦位密接山形文が出土している事から、この段階の遺跡と比定できよう。

若宮第IV段階（第12図）

押型文土器の展開期である。関東地方の東山式・平坂式古の無文土器群主体の時期に対比される。若宮IV群1～3類、VI群が比定される。第III段階において成立した異方向密接施文がより主体的文様として確立するとともに、関東地方における無文土器群への変化の影響によって、無文土器をベースにした異方向帯状施文土器が成立したと考えられる。また、押型文の中では山形文が圧倒的に主体を占めるようになる。この傾向は、既に第III段階の尾上イラウネ遺跡にも現れているが、第IV段階の東大室クズレ遺跡では山形文が主体を占めている。異方向帯状施文における山形文の卓越は、無文土器をベースにしてそこに異方向施文という幾何学的文様を描く上で、山形文が最も線状の文様効果を持っている事に理由があると思われる。東大室クズレ遺跡では、山形文と沈線文を併用する土器も存在している。

若宮遺跡ではこの段階は既に衰退期に入り、IV群、VI群土器の出土は少ないが、関東地方により近い大平A遺跡（漆畑1986）、東大室クズレ遺跡において纏まった資料が出土している。大平A遺跡では異方向帯状押型文土器と平坂式類似の無文土器が出土している。東大室クズレ遺跡では、異方向密接施文、横位帯状施文の土器も少量含むが、異方向帯状施文の山形文が圧倒的に主体を占めている。異方向帯状施文には、口縁部横位1帯型、2帯型、内面施文などバラエティーに富んでいるが、異方向施文としては斉一性が高い。平坂式に比定される無文土器も相当量出土している。その他に、横走撚糸文、網状撚糸文土器も出土しているが少量である。池の本遺跡（笹津他1967）もこの段階の遺跡である。

表1 押型文系土器群前半期の編年

	若宮遺跡	主な内容	静岡県の主要遺跡	他地域	関東編年
第I 段 階	I群	表裏縄文	三の原1群1・4・5類 大谷津3群2類b種 清水柳北I群	川子石 向山	井草
	II群1類	表裏縄文	中見代I1群2類	枋原	夏島
	III群2類	表裏撚糸文	小松原A I群A・B類		
第II 段 階	II群2類	大粒縄文	大平C3号住	枋原 大鼻	稲荷台古
	III群1～3類	撚糸文化増大	菖蒲ヶ池A2号住		稲荷台新
	V群1・2類	押型文成立	広合1群		稲荷原古
		縦位密接施文 格子目文・山形文	小松原A I群C類II群III群 三の原2・3群 若宮4・9・24号住		
第III 段 階	II群3類	異方向密接縄文	若宮12・19・20号住	立野 大川古	稲荷原新
	III群3～5類	横走網状撚糸文	八兵衛洞A～F類		花輪台古
	V群1～5類	押型文多様化 縦位密接施文 異方向密接施文	尾上イラウネ1～3号住 三沢西原S B17・18		大浦山I
第IV 段 階	IV群1～3類 VI群	異方向帯状施文 無文土器増加	大平A 池の本 東大室クズレI・II・IV群	樋沢 大川新	花輪台新 東山 平坂古

V 収束

以上、周辺遺跡の様相を援用しながら若宮遺跡出土土器群を第I～IV段階に整理し、その変遷を検討してきた。その結果、第I段階 押型文土器出現以前、第II段階 縦位密接押型文土器成立期、第III段階 縦位密接押型文土器多様化と異方向密接押型文土器成立期、第IV段階 無文土器群増加と異方向帯状押型文土器成立期として、静岡県東部における押型文土器の出現と前半期の展開を段階的に把握する事ができた。各段階の押型文土器を代表する遺跡としては、II～III段階若宮遺跡、

III段階尾上イラウネ遺跡、IV段階東大室クズレ遺跡を位置づける事ができる。そして、このような静岡県東部地域における押型文土器の出現と前半期の変遷には、関東地方の撚糸文土器群の変遷と密接な関係が認められ、運動した変化である事が把握された。逆に、静岡県東部における押型文土器の成立を含む変遷は、他地域の押型文土器からの直接的な影響を想定しなくても、連続的な変化を辿る事が可能であった。今後の資料の増加によって各段階はさらに細分が可能であり、よりスムーズな変遷が追えるようになると思われる。

現段階における我々が考える若宮遺跡と押型文系土器群前半期を編年的に纏めたものが表1である。第IV段階以降の押型文系土器群後半期は、横位帯状密接段階(三戸式新)、全面楕円文主体段階(田戸下層式)、粗大楕円文(高山寺式)主体段階(田戸上層式)へと続くと考えられる。今後は、若宮遺跡を中心とするこの地域における第I～IV段階の変遷を基軸にして、周辺地域における押型文系土器群を再検討し、押型文系土器群全体の展開を構築していく必要があるであろう。若宮遺跡を中心とする静岡県東部地域における押型文土器の資料増加は目覚ましく、馬飼野氏、関野氏、池谷氏等により詳細な分析を加えた優れた報告書が纏められており、押型文土器の出現と展開を考える上で一層注目される地域となると思われる。本稿もこのような優れた報告書の分析を基礎にしたものであるが、やや撚糸文系土器群との関係を過大評価し、関東的な視点から押型文土器を見過ぎたのではないかと危惧している。報告書の理解不足については御寛恕をお願いする次第である。

文末になりましたが、関係資料の見学に際しては、馬飼野行雄、渡井英誉、関野哲夫、池谷信之、広瀬和夫氏等多数の方々にお世話になり、貴重な御意見を頂く事ができました。また、いつもながら、中島宏氏、大塚達朗氏からは種々の貴重な意見を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

引用参考文献

- 会田 進 1988 「中部山岳地方押型文文化の様相—長野県を中心に—」『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題』 p 344～p 374
- 会田進他 1988 『向陽台遺跡—一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 池谷信之他 1990 『広合遺跡(b・c・d区)・広合南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第49集
- 池谷信之他 1991 『広合遺跡(e区)・二ツ洞遺跡(a区)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第52集
- 石川治夫他 1985 『寺林南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第33集
- 漆畑 稔 1985 『菖蒲ヶ池A遺跡発掘調査報告書』大仁町埋蔵文化財調査報告第7集
- 漆畑 稔 1986 『長者ヶ原大平遺跡群第II次調査概報』大仁町埋蔵文化財調査報告第10集
- 秋元真澄他 1992 『東大室クズレ遺跡』加藤学園考古学研究所
- 岡本東三 1989 「立野式土器の出自とその系統をめぐって」『先史考古学研究』第2号 p 91 3～p 118
- 鹿島保宏 1988 『寺谷戸遺跡発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財委員会
- 可児通宏 1989 「押型文系土器様式」『縄文土器大観』1草創期 早期 前期 p 266～p 269
- 小松 虔 1978 「栃原岩陰遺跡の押型文土器の出現時期」『中部高地の考古学』I p 83～p 93
- 笹津海祥・白石竹雄 1967 『池の本』修善寺町教育委員会
- 篠原 正 1977 『金堀遺跡発掘調査報告概報』富里村史編纂委員会

- 鈴木道之助 1977 「東寺山石神遺跡の撚糸文土器について」『東寺山石神遺跡』p 455～p 470
- 鈴木裕篤他 1990 『大谷津遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第50集
- 関野哲夫他 1980 『長井崎遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第18集
- 関野哲夫 1988 「東海地方における押型紋段階の様相」『縄文早期を考える－押型文文化の諸問題－』p 152～p 275
- 関野哲夫他 1989 『清水柳北遺跡発掘調査報告書その1』沼津市文化財調査報告書第47集
- 関野哲夫他 1990 『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』沼津市文化財調査報告書第48集
- 関野哲夫他 1992 『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書IIその1－考古学的調査－』沼津市文化財調査報告書第53集
- 高野好之他 1988 『土手上・中見代第II・第III遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第43集
- 高野好之他 1989 『中見代第I遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第45集
- 土井義夫他 1974 『秋川市二宮神社境内の遺跡』秋川市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 戸沢充則・会田進他 1987 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会
- 戸田哲也 1989 「縄文土器の型式学的研究と編年（中篇その2）」『神奈川考古』第25号 p 57～p 79
- 中島 宏 1988 「関東地方における押型文土器編年の再検討」『縄文早期を考える－押型文文化の諸問題－』p 115～p 151
- 西村正衛・金子浩昌 1960 「千葉県香取郡鴨崎貝塚」『古代』第35号
- 原川雄二他 1982 「多摩ニュータウンNo205遺跡」『東京都埋蔵文化財センター調査報告』第2集
- 原田昌幸 1987 「土器様式における他様式型式表象の受容と展開」『竹筥』第2号
- 平林将信他 1976 『陣場上・平畦遺跡－一般国道246号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告（I）』静岡県教育委員会
- 馬飼野行雄・伊藤昌光 1983 『若宮遺跡』富士宮市文化財調査報告第1集
- 馬飼野行雄 1989 『小松原A遺跡』富士宮市文化財調査報告第12集
- 松田真一 1988 「大川式土器と神宮寺式土器」『縄文早期を考える－押型文文化の諸問題－』p 30～p 33
- 水島和弘他 1985 『三沢西原遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第4集
- 宮崎朝雄・金子直行 1989 「井草式土器及び周辺の土器群について」『研究紀要』第5号 p 1～69（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎朝雄・金子直行 1990 「撚糸文系土器群と押型文系土器群の関係」『縄文時代』創刊号 p 26～p 51
- 宮崎朝雄 1991 「撚糸文系土器群終末期の一樣相－稲荷原式新・大浦山I式・花輪台I式段階の土器群－」『埼玉考古』第28号 p 9～p 24
- 宮下健司 1988 「縄文草創期の土器・縄文早期の土器」『長野県史』考古資料編全1巻 p 73～p 82
- 山形真理子他 1991 『三の原遺跡』立教学院三の原遺跡調査団
- 山田 猛 1988 「押型文土器群の型式学的再検討－三重県下の前半期を中心として－」『三重県史研究』第四号 p 45～p 74
- 山田 猛 1988 「三重県から見た前半期の押型文土器」『縄文早期を考える－押型文文化の諸問題－』p 27～p 288
- 山内清男 1935 「古式縄紋土器研究最近の情勢」『ドルメン』第4巻1号 p 34～p 44
- 吉田 格 1988 「縄文早期花輪台式文化－茨城県花輪台貝塚－」『考古学叢考』下巻 p 455～p 479

研究紀要 第9号

1992

平成4年10月23日 印刷

平成4年10月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 望月印刷株式会社